

近代の歌人II

和歌文学講座9

和歌文学講座 第9巻

昭和四十五年十月二十日 初版印刷
昭和四十五年十月二十五日 初版発行

定価 一八〇〇円

編者 和歌文学会

会長 久松潜一

発行者 及川篤二

印刷所 暁印刷株式会社

101 東京都千代田区猿樂町二ノ八ノ十三

桜楓社

TEL(元) 五六六〇―二
振替東京 一八〇二〇

検印省略

近代の歌人
Ⅱ
目次

尾上柴舟……………藤田福夫……………九

一 津山時代……………九

二 出京と学生時代……………二

三 ロマン主義時代——『銀鈴』の学んだもの……………五

四 自然主義時代……………三

五 大正時代……………三七

六 昭和時代……………二九

七 終りに……………三

与謝野 寛……………新聞進一……………三

一 少年時代……………三

二 習作期(一)——『鳳雛』の刊行……………三六

三 習作期(二)——『婦女雜誌』への投稿……………三六

四 習作期(三)——『万葉廬詠草抄』……………四〇

五 文壇への登場……………四三

六 「明星」発刊前後……………四四

七 浪漫歌風の樹立……………四七

八 浪漫歌風の展開……………五一

九 『相聞』をめぐる……………五二

一〇 「自らを嗤ふ歌」……………五七

二一 大正から昭和へ……………五九

三 最晩年の歌境……………三

与謝野晶子……………青木生子…六

一 歌人晶子の誕生……………六

二 『みだれ髪』の形成……………七

三 『みだれ髪』の歌風と意義……………七

四 『みだれ髪』以後……………八

石川啄木……………阿部正路…四

一 はじめに……………四

二 啄木の墓……………五

三 啄木の生涯……………一〇

四 啄木の日記……………一五

五 啄木の歌……………一七

六 啄木以後——結びに代えて……………二三

北原白秋……………河村政敏…三元

一 白秋に於ける詩と短歌……………三元

二 歌集概説……………一三

三 歌風の展開……………一四

吉井 勇……………木俣 修…一五

正岡子規……………宮川康雄……………一七

一 青少年期……………一七

二 日本新聞社入社……………一八

三 日清戦争従軍……………一九

四 「歌よみに与ふる書」と「百中十首」……………一九

五 啓蒙活動と新歌風の探究……………二〇

六 歌風の完成……………二五

伊藤左千夫……………扇畑忠雄……………二三

一 牛飼の歌……………二三

二 野菊の宿……………二九

三 栄えと滅び……………三四

四 湖と雲と海……………三一

島木赤彦……………本林勝夫……………三六

一 赤彦の人間性——抒情的性格とリゴリズム……………三八

二 赤彦の位置——終焉前後……………三四

三 『切火』刊行まで——歌壇的進出への道程……………三九

四 『氷魚』以後の世界——赤彦短歌の樹立……………三六

斎藤茂吉……………藤川忠治……………三六

一 『斎藤茂吉全集』……………三六

二 斎藤茂吉略伝……………	二六七
三 茂吉年譜を示すもの……………	二八五
四 むすび……………	二九一
前田 夕暮……………	二九五
田 中 順 二……………	二九五
一 『収獲』まで……………	二九五
二 第一期「詩歌」時代……………	三〇一
三 「日光」前後……………	三〇七
四 自由律短歌……………	三二一
五 定型回帰……………	三二四
六 結……………	三三八
木下 利 玄……………	三三一
五島美代子……………	三三一
尾山篤二郎……………	三三三
武川 忠 一……………	三三三
一 生い立ち……………	三三三
二 文学への出発……………	三三六
三 上京……………	三四八
四 転回点の意味……………	三五三
五 古典憧憬……………	三五四
六 旅と自然……………	三五七
七 平明の意義……………	三六〇

八	暢達と鬱屈……………	三六二
九	晩年―結び……………	三六四
引用歌索引……………		三六九

近代の歌人

Ⅱ

尾上柴舟

藤田福夫

一 津山時代

岡山県の津山は、古くは美作の国府所在地であり、旧藩時代は親藩松平氏十萬石の城下として津山盆地の中心であった。水の清い吉井川が町の南を流れ、交通の要地であるとともに文化的品格をそなえた町である。蘭医箕作阮甫ら一族およびその家系をひく菊池大麓が津山の出身であり、宇田川玄随らも江戸で津山侯に仕えており、津山の学問的伝統は豊かである。

柴舟、尾上八郎は明治九年八月二〇日、この津山の田町七番地で生まれた。父北郷直衛、母磯の三男である。姉二人（長女夭折）があった。父は書画の嗜みもあったが柴舟生誕の年に死去した。家の旧禄は二百十石、代々御槍奉行を勤めていた。屋敷四百余坪の中級武士であったが、維新後の家計は楽でなかったようである。柴舟の幼時の記憶によると祖母の嫁入の持参品中に『源氏物語』などがあり、家の本箱の引出しには「美しい紙切れ」がしまわれていて、何かと母に聞くと「短冊」というものと教えられた。新年に歌がるたを取る大人たちの影響でその歌を聞き覚えていたのみでなく、母からは作者名の読み方も教えられ、「歌とそれを書いたものには何となく親しみを覚えて」いたという。（追憶・大口先生に逢ふまで）。「水甕」昭九・一〇）これは恐らく小学校入学前のことであつたろう。柴舟と歌と

書との出会いはこのような形で始まっていたのである。こうした環境と書画に興味を持った父の血を受けた素質とが次第に少年八郎を文芸的方向に進ませたのであろう。しかし、生活状態の改まった維新後のその家庭は父の死によって一層寂しいものがあつた。

ランプの灯鬼の耳のやうなるに思ひぞ出づる古里の山

は「永日」中の作であるが、これについて柴舟は「姉は嫁し、兄たちも皆東京に出たあとの母と子とは寂しかった。ランプの心を切ることはむづかしいことで切り方を母によく教へられた。……」（尾上柴舟年譜「水甕」昭一一・四）と語っており、ほのぐらい住居の中での父無き家庭生活がしのばれる。後、尾上家に養なわれたのも早く父を失なつたことが一つの理由になつていふと思われる。

明治一四年鶴山（かくさん津山城を鶴山城という）小学校下等八級に入学した。小学校時代は最優等で旧藩主松平確堂の前で「本を読んだりしては墨や筆を拝領した……」（郷土を語る）「大毎岡山版」昭九・一・二〇）という。小学校時代上原看雲（安井息軒門。柴舟の次兄がその塾頭をつとめたことあり。）らの漢学塾に通うほか、友人に誘われて上の町の大隅神社神官直頼高（大、八・二没・六一歳）に入門し、『草庵集』、『同諺解』などを与えられ、『新古今集』、『語の八衢』なども教えられた。この頃、町の実業家の家で開かれた鶯蛙会に加わつたが、その会の詠草は在京の鈴木重嶺、小出榮に送られ添削を受けた。また直頼高の友人の郷土歌人たちにも接した。その一人大田原良当（大六没、八二歳）の家で柴舟ははじめて『万葉集』を見た。また同じく先輩の梶村篤敬（大五没、六二歳。明四二年宮中歌会預選に入る）は小出榮風の作であつたという。

この頃の柴舟の作として

野も山もちちに白銀しきつめて今朝面白き庭の初雪

が伝えられている。(津山、植月某談「大毎岡山版」昭九・一・一〇)

津山時代の柴舟は早くも歌に興味を見出し、年少よく先輩の会にも連なっているが、必ずしも文学趣味にのみ片よった特殊な少年ではなかったようである。それは

雀の子とると攀ぢにし軒瓦蛇ともならで人は生ひにし (銀鈴)

茶の木原なかぬ驚ついばむを兄と追ひにし冬を忘れず (空の色)

の作や、友人たちと津山の衆楽園(藩侯の野外の苑)近くの小川へ螢狩りに行き狐火に出会った話(「狐火」「山陽新聞」昭三〇・四・八)などによってうかがわれる。素朴に自然の中に生きた少年でもあったのである。

二 出京と学生時代

明治二三年、一五歳で鶴山小学校高等科を卒え、五月中学に入学する目的を持って上京した。当時は山陽線が岡山まで達しておらず、中国鉄道も無かったので同行八人、吉井川を川舟で下って和氣に向かい、竜野から鉄道に乗車した。東京では兄に迎えられ、後、麴町三丁目鈴木伝兵衛方に落ちついた。同月東京英語学校(後の日本中学校)に入学した。鈴木氏について柴舟は東京に出てからの三人の恩人の一人に数え、第一に鈴木氏をあげ、第二に大口鯛二、第三に落合直文をあげ、次のように述べている。「鈴木君は中学時代に、私を其家に置いて、何彼と、丁寧に世話をされ、金銭のこと、衣服のこと、学校のこと、いづれも、綿密に、親切に、尽力して下さいました。高等学校時代には、直接の御世話を受けなかったが、猶、何彼につけて、よくよく、保護せられました。」(「国文学」萩の舎主人追悼録、明三七・二)

この頃は短歌よりも漢詩に力を注ぎ、絶句を『少年園』『日本の少年』『少年文庫』などに投じた。二五年四月、東京府尋常中学校三年生に転入学した。同年三月から八月までは家事の都合で暫く帰郷しその間また直頼高に学び、古今集の暗誦につとめた。先に柴舟は検事正森安大三郎に養なわれたことがあったが、意見合わず同家を出ている。この年旧津山藩士尾上勁に養なわれ、後三四年勁の長女とらと結婚した。勁は石川県小松などで裁判所書記を勤め、三四年、兵庫県竜野区裁判所判事となり、退職後弁護士を開業、昭和二年没した。

東京府尋常中学校時代の柴舟の短歌作品三二首が同校の学友会雑誌に掲げられていることが奥村さき氏の調査（柴舟の歌集以前）「水甕」昭四三・一で明らかにした。その数首を引く。

わびしくも御笠とまをす人もなし木のした露はあめにまされど（明二六年、四年生）

山はさけ海はあすべき世ならねばいまものこらん君が真心（実朝墓、（同））

水鶏なくこゑにやぶれぬ花あやめかをるまぐらの短夜のゆめ（明二七年、五年生）

などはそれぞれ古歌をふまえていること明らかであり、

もえそむる岸の柳のかげみえて水にもうかぶ春のいろかな（明二七年、五年生）

は桂園風の叙景歌である。それぞれ柴舟の古典修学が深まりつつあったことを示している。二五年再度上京後の柴舟は直頼高の紹介で江刺恒久を訪ねた。県居派の流れを汲む恒久の古道發揮、古語修練のために歌を詠むという考えに柴舟は満足であったという。しかしその精神に触れて得るところがあった。「歌は歌をよく詠むために詠むと思つてゐた。」（追憶・大口先生に逢ふまで）「水甕」昭九・一〇）とは芸術派としての柴舟の立場が早く確認されていたものと言えよう。鈴木重嶺、伊東祐命らの作を意識し、また美作国鶴田に一時移住したことのある小出榮の歌集『くちなしの花』を上野の図書館で筆写したのも中学五年の頃であった。「大きな立派な本で、とても買へさうもないので残

らず写した。」(同前書)という。『くちなしの花』は雪、月、花篇三冊で、美濃判計一七三丁の大冊であるが、丁度柴舟が中学五年に進んだ二七年の三月に刊行されている。これを全部筆写する熱意を持った歌ずきの青年であつたのである。

江刺恒久の教えに飽き足りないものを覚えた柴舟は大口鯛二を訪ねた。「自由に詠め」と言われ、「すっかり大口先生の感化を受けて、真の歌人とならうといふ野心を起したので既う夢中になつて作つたものでした。」(「予が半生の歌人経歴」『文章世界』明四一・四)とか「大悦びで日記的に多数作り出した」(「細風抄」年譜)とか記しており、青年期の作歌意欲の強さを物語るものである。柴舟は二七年あたりからさらに落合直文の新風に魅かれて御歌所風から離れるが、上京後最初に師と仰いだのが御歌所派の新派たる大口鯛二であつたことは後年の柴舟を新古典的歌風の持主とし、また書道専門家として方向づける基盤となつた。後年「今のわたくし」(「短歌文学全集」(第一書房)収載。「東京朝日新聞」昭五)に柴舟は當時のことを次のように記した。

大口先生及びその一派の歌は、当時にあつては、清新なものであつた。軟やかに、柔かに、穏やかに、しかし新材料をつかまへて、新趣味を発見しては詠んで行く。旧いものばかり郷里で目にしたものに取つては心ゆくことが多かつた。ことにその大人たちの手跡の立派なこと、色紙短冊に入念に書いたのは、目ざめるばかりの美しさであつた。……書の方は考へてはゐたが、習ひはじめなかつたので、極めて変なものばかり書いてゐた。が、今日の愛好は、ここから端を発してゐる。

上京後間も無い地方青年の美意識を動かした新風の歌と美しい文字の印象とがきわめて強かつたことが知られる。

明治二八年第一高等学校に入り、同級生阿部叔吾に紹介されて同校教授であつた落合直文の門に入つた。次第に同門の金子薫園、服部躬治、与謝野寛らを知るに至つたが、直文敬慕は終生かわらなかつた。一高の「歌学会」に入り、

後その幹事となった。『学友会雑誌』に歌を発表するため柴舟の号がこの頃つくられた。三一年五月、落合直文は門下の青年一五人と東京下谷の花見寺に会合を開いた。久保猪之吉、小日向定次郎、沼波武夫（瓊音）、毛呂清春、八杉貞利らがそのメンバーである。この時の柴舟作として

かぜなきにかきのつつじの花おちて夕ぐれさむしふるでらのは

など八首が伝えられている。〔花見寺集〕。毛呂清春「水甕」昭三四・一この花見寺の歌会の直後本郷桜観音——久保猪之吉下宿——で「いかづち会」の創立が議せられたのであるから花見寺歌会の持つ意義は大きい。このように新派和歌の温醸期に当って青年柴舟が新機運の大きい担い手の一人たる直文の直下に参じ得たのはまことに恵まれた条件であった。

「いかづち会」の創立は三一年六月三〇日（「いかづち会規約」記載の日付による）で、柴舟は服部躬治のすすめでこれに加わった。しかし同会で柴舟は主導権は發揮しておらず、同会詠草（『読売新聞』『心の華』などに発表）中の作品も未だ必ずしもその特色を發揮するに至っていない。しかし中学時代のような習作性を脱し、一味清新さを持つ田園情趣を写し、特に次のごときは大らかな若い調べの中に後年の思索歌を思わせる内容を歌っている。

あさなゆふな闇と光とゆきかよふこのおほそらはたれしらすらむ

この年六月第一高等学校を卒え、九月帝国大学、文科大学国文学科に入学した。翌三二年一十一月上野梅川楼で開かれた国風家懇親会の席上、小出粲と論議をかわし、粲は怒って退席した。控え目で冷静な柴舟にはめずらしい若い日の出来事であった。三三年歌会始の預選に入った。格に入った着想と調べが見られる。

大君のちとせをよばふ田鶴がねにまつのあらしは静まりにけり

後年「み光のもとにて」を出し、明治的臣民として秀品を残したが、その良き臣民の道は此処に定められた。大学